

## □原著論文□

小児看護学実習における看護学生と子どもとの  
援助関係の構築にかかわる自己洞察吉田 裕子<sup>1</sup> 藤田 千春<sup>2</sup>

## 抄 録

本研究は、小児看護学実習における看護学生と子どもとの援助関係の構築にかかわる自己洞察の実態を明らかにし、看護学生の自己洞察に働きかける教育支援を検討することを目的とした。小児看護学実習を履修した看護系大学および短期大学の看護学生19名に半構成的面接調査を行い、質的記述的に分析を行った。結果、看護学生と子どもとの援助関係の構築にかかわる自己洞察として【子どもと自分との関係性の模索】【子どもとの関係構築における気がかり】【子どもに対するコミュニケーションの気づき】【子ども特有のアセスメントの実感】【子どもへのコミット不足の気づき】【子どものケアの迷いを解決するための姿勢】【子どもに寄り添うケアへの関心】という7つのカテゴリーが抽出された。看護学生が子どもへの関係構築に向けて自己洞察することは、看護学生の子どもへの援助の姿勢を変化させる一助となることが考えられ、受け持ち早期から看護学生の自己洞察に働きかける教育支援の方向性が示唆された。

キーワード：小児看護学実習、看護学生、子ども、援助関係、自己洞察

## I. はじめに

文部科学省<sup>1)</sup>は、「看護教育モデル・コア・カリキュラム」において、看護学教育に「対人関係形成能力の基礎となる、自らよく知り、自己を深く振り返る内省、自己洞察の強化」を提示している。このことから看護実践力育成に学生の自己洞察力を身につけることが看護基礎教育に求められている。人間関係の看護論を提唱する Peplau<sup>2)</sup>は、「看護師-患者の関係が治療的であろうとするならば、自己洞察力が一つの基本的な手段や点検の基準として働かなければならない」と述べている。精神看護学実習において、看護学生は、患者との関わりの中から自己洞察をしていると報告されている<sup>3)</sup>。これらのことから、看護師と患者の関係について自己洞察を促す学習として、臨地実習は有用な学びの場であると考えられる。

中でも小児看護学実習においては、認知能力、コミュニケーション能力の発達途中にある子どもとの援助的

な関係の構築が求められるが、看護学生の多くは、子どもとの接触体験が少なく、短い実習期間で子どもや家族との援助関係を築き看護を実践することは容易なことではない<sup>4,5)</sup>。また、看護学実習における患者とのコミュニケーションの困難度は、小児看護学実習が最も高いと報告されている<sup>6)</sup>。看護学生の中には、子どもとの関係構築ができず、看護実践に至らない状況で実習を終了する場合もある<sup>7)</sup>。看護学生と子どもが親しくなり接近する関係性を基盤にして看護学生は子どもと関わることで、関係性を発展させながら子どもを理解し看護援助を展開している<sup>8)</sup>。この関係性の変化には、学生の子どもに対する見方や行動の変容が必要であり、その過程に学生の自己洞察が関与していると論じられている<sup>9)</sup>。これらのことから、子どもを理解し看護実践に進めていける看護学生は、子どもとの関わりを通して自己洞察を行いながら子どもとの援助的な関係へと変化させている可能性が考えられた。し

受付日：2019年9月4日 受理日：2019年11月29日

<sup>1</sup> 東海大学医療技術短期大学 看護学科

Department of Nursing, Tokai University Junior College of Nursing and Medical Technology  
yy505730@tsc.u-tokai.ac.jp

<sup>2</sup> 国際医療福祉大学 小田原保健医療学部 看護学科

Department of Nursing, School of Health Sciences at Odawara, International University of Health and Welfare

かし、子どもとの援助関係にかかわる自己洞察の実態は明らかにされておらず、自己洞察を促進するための具体的な支援方法は示されていない。

今回、小児看護学実習において看護学生が子どもとの援助関係を構築し、子どもを援助するためにどのような自己洞察がなされたのかを明らかにすることで、小児看護学実習を履修する看護学生に対する子どもとの援助関係の構築と看護実践に向けた教育的支援への示唆を得ることにつながると考えた。

## II. 研究の目的

小児看護学実習における看護学生と子どもとの援助関係の構築にかかわる自己洞察の実態を明らかにすることである。

## III. 用語の定義

本研究では以下の用語について定義する。

自己洞察：子どもとの関わりにおける自己の感情、思考、行動を意識し、気がついたこととする。

援助関係：子どもおよび家族に対し、看護者が専門性を発揮し責務を果たすために結ぶ対人関係とする<sup>10)</sup>。

## IV. 研究方法

### 1. 研究デザインおよび研究対象者

研究デザインは質的記述的研究とし、研究対象者は、小児看護学実習を履修した関東圏内の看護系大学3年次生および看護系短期大学3年次生とした。研究参加の候補者については、小児病棟で子どもを受け持ちし、看護過程の展開とケアを実施する学習内容で実習した看護学生を対象にした。

### 2. 調査期間およびデータ収集方法

研究対象者が所属する学校内のプライバシーの保てる個室で、45～50分程度の半構造的面接調査を実施した。学生の背景を把握することと、インタビューの導入として、子どもの接触体験の有無など2～3分程度で回答できる自記式の質問紙調査を実施した。面接

調査の内容は、小児看護学実習で看護学生が子どもを受け持ち始めた日から看護実践までの過程で、子どもとの関わり場面における子どもへの対応と子どもに対する感情、思考や行動への意識や気づきとその変化についてである。面接調査の内容は研究対象者の許可を得て、ICレコーダに録音した。調査は2017年2～3月に実施した。

### 3. 分析方法

看護学生の自己洞察の実態を明らかにするため、看護実践の状態から本質を取り出す研究方法<sup>11)</sup>を参考にし、分析を行った。音声データより逐語録を作成し、分析はデータ収集と並行して行った。逐語録を熟読し、子どもとの関わりにおける看護学生の感情、思考や行動への意識や気づきの内容に着目し、自己洞察が語られたまとまりのある文章を抽出し、意味内容を損なわないようコードを作成した。それぞれのコードの内容を検討し、意味内容の類似するコードの抽象度を上げてサブカテゴリー化し、さらに関連性を整理し抽象度の高いカテゴリーを作成した。分析の過程にあたっては、信頼性・妥当性を高めるために、小児看護学の研究者から継続的なスーパーバイズを受け、データからコードまたカテゴリーの分析過程を繰り返し、カテゴリーがデータの意味内容を適切に反映していることの確認を重ねた。

### 4. 倫理的配慮

研究依頼先の看護系大学と看護系短期大学の看護学科長の協力を得た後に、研究対象者を募集した。研究対象者に対し、研究の主旨と方法、研究参加の自由、個人情報保護、途中中断によって不利益が生じないこと、今後の実習や成績評価に影響しないことを文章と口頭で説明した。また、面接前にも研究参加の自由意志などの説明を行った。参加同意が得られた際には、同意書に署名を得た。さらに、面接の日程は学業と重ならないように配慮し、面接中は気分不快が生じていないか表情や言動に注意した。

本研究は、対象とした大学および短期大学の研究倫

理審査委員会の承認を得て行った。

もの発達段階は、乳児期2名、幼児期11名、学童期5名、思春期4名であった。

V. 結果

1. 研究対象者の概要

研究対象者である看護学生は、19名であり全員が女性であった。教育課程はA看護系大学3年次4名、B看護系短期大学3年次15名であった。面接に要した時間は、50～70分で平均60分であった。小児看護学実習の病棟実習方法は、両校同様に10日間の実習期間であった。実習期間中の2日間は学内での学習で、8日間は小児病棟で子どもを受け持ち、看護過程の展開とケアを実施するものであった。病棟実習期間中の子どもの受け持ち状況は、1名を7～8日間受け持った学生が16名であり、2名の子どもを受け持った学生は3名であり、子ども1名あたり2～5日間受け持っていた。看護学生が、実習中に受け持った子ども

2. 看護学生の自己洞察

小児看護学実習における看護学生と子どもとの援助関係にかかわる自己洞察として、【子どもと自分との関係性の模索】【子どもとの関係構築における気がかり】【子どもに対するコミュニケーションの気づき】【子ども特有のアセスメントの実感】【子どもへのコミット不足の気づき】【子どものケアの迷いを解決するための姿勢】【子どもに寄り添うケアへの関心】の7つのカテゴリー、21サブカテゴリーが抽出された(表1)。表においては、看護学生の語りの状況も示した。以下、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》、代表的な看護学生の語りを「 」で示す。なお、「 」内に記載された(A)などは、当該の看護学生を示す。

表1 看護学生と子どもとの援助関係の構築にかかわる自己洞察

カテゴリー	サブカテゴリー	看護学生	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	人数	
子どもと自分との関係性の模索	子どもとの距離感への模索		○	○					○	○	○								○	○		7	
	友好的な反応による関係性の確認					○	○		○				○	○								6	
	他者による肯定的評価からの確信				○				○			○							○			5	
子どもとの関係構築における気がかり	より良い関わり方への焦り			○	○		○												○	○		6	
	子どもを早く理解することのプレッシャー		○	○		○	○	○			○											8	
	不用意に子どもを傷つける心配		○			○	○						○									5	
	客観的に子どもを見る余裕のなさ			○																○		2	
子どもに対するコミュニケーションの気づき	大人とのコミュニケーションの違い												○	○								4	
	子どもの言動に対する思い込み											○	○									3	
	受身のコミュニケーション特性			○																○		2	
子ども特有のアセスメントの実感	表面的な情報での解釈					○	○	○					○						○	○		6	
	発達を踏まえたアセスメントの重要性					○					○		○	○	○							5	
	記録と関わりの両立の必要性		○	○		○																4	
子どもへのコミット不足の気づき	自己の行動を優先した関わりの気づき		○						○	○		○		○					○	○		7	
	子どもとより深く関わることへの気づき		○	○					○			○	○								○	6	
子どものケアの迷いを解決するための姿勢	相談し解決する姿勢		○	○		○	○		○	○		○	○	○	○							10	
	手本を参考にする姿勢			○					○			○	○	○								5	
	メンバーとの悩みの共有									○										○	○	3	
子どもに寄り添うケアへの関心	子どもに負担をかけない気遣い			○		○	○	○					○	○						○		7	
	子どもを主体にしたケアの意識		○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○				○	○	○	17
	子どものケアへの使命感		○	○								○	○							○	○	○	8

注) ○印は看護学生の語りの状況を示す

## 1) 【子どもと自分との関係性の模索】

このカテゴリーは、看護学生が自分と子どもとの関係性に意識を向け、模索していたことを示しており、《子どもとの距離感への模索》《友好的な反応による関係性の確認》《他者による肯定的評価からの確信》から構成された。

看護学生は、受け持った子どもとの関わりを試みるなかで、自分と子どもとの関係性について、「一定の距離を保ちつつどの程度まで詰めていいのかなと思って(A)」といった《子どもとの距離感への模索》によって、自分と子どもとの距離感を探っていた。そして看護学生は、子どもの反応から「笑顔で笑ってくれたりするといい関わりができていのかと思って思えた(E)」という子どもからの《友好的な反応による関係性の確認》を子どもの反応をもとにしていた。また、子どもとの関わり状況を「先生から肯定してもらい、(関わりは)これでいいんだって気づけた(O)」のように《他者による肯定的評価からの確信》をしていた。

## 2) 【子どもとの関係構築における気がかり】

このカテゴリーは、看護学生が子どもとの関係を築くにあたっての気がかりがあった様子を示しており、《より良い関わり方への焦り》《子どもを早く理解することのプレッシャー》《不用意に子どもを傷つける心配》《客観的に子どもを見る余裕のなさ》で構成された。

看護学生は、子どもと関わった場面を振り返り、「言葉で伝えたいこといっぱいあったんですけど、焦ってしまって上手く伝えられなかった(F)」という《より良い関わり方への焦り》を感じていた。また、「(子どもに)何が心配なのか聞かなきゃなと思って(S)」ように《子どもを早く理解することのプレッシャー》を感じていた。一方で、「大人よりも子どもはあんまり変なこと言って傷つけちゃったらいけない(K)」という《不用意に子どもを傷つける心配》を抱いていた。また、「(気持ちの)余裕が生まれればもっと子どもに対して深く考えられるのかなー(B)」といった《客観的に子どもを見る余裕のなさ》を感じていた。

## 3) 【子どもに対するコミュニケーションの気づき】

このカテゴリーは、看護学生が子どもとの関わりを通して、子どもに対応したコミュニケーションの手がかりとなるような気づきがあったことを示しており、《大人とのコミュニケーションの違い》《子どもの言動に対する思い込み》《受身のコミュニケーション特性》から構成された。

看護学生は、子どもに対するコミュニケーションにおいて、「大人の方にはなんでも聞いていたっていうか(言葉での)コミュニケーションに頼っていたんで、観察して気持ち考えることに改めて気づいた(L)」というように《大人とのコミュニケーションの違い》を感じていた。また「(受け持ち始めは、問いかけに対して)1つ答えたら黙り込んじゃう感じだったから、(こんなに)子どもから一言以上お話ししてくれると思ってなかった(S)」のような《子どもの言動に対する思い込み》に気づいていた。

看護学生は子どもとのコミュニケーションを振り返り「(私は)相手に話してもらった方が楽なタイプなので、(自分の)コミュニケーションに出てくるのかなって(B)」というような《受身のコミュニケーション特性》を小児看護学実習で感じていた。

## 4) 【子ども特有のアセスメントの実感】

このカテゴリーは、看護学生が子どもの理解を深める子ども特有のアセスメントについて関わりを通して実感していたことを示しており、《表面的な情報での解釈》《発達を踏まえたアセスメントの重要性》《記録と関わりとの両立の必要性》から構成された。

看護学生は、「ゲームもしてたし、子どもの『全然平気』という言葉でほんとに平気なんだと思っていた(K)」という《表面的な情報での解釈》への気づきがあった。そして、「成長発達を考えてから、その子のために、その子が主体となった考えになった(O)」など《発達を踏まえたアセスメントの重要性》を感じていた。また、看護学生は実習での行動計画を見直し、「子どもとの関係性を少しでもつくったほうがいいのかと思って思い記録より関わりを多くした(D)」、「子どもとの関わりを大切にしたいけど、どうしても記録

が大きい (B)」といった《記録と関わりの両立の必要性》を実感していた。

5) 【子どもへのコミット不足の気づき】

このカテゴリーは、看護学生は、教員や看護師の問いかけや助言を受けて、子どもに対する自己の関わり方が自分優先であったことに気づかされたことを示しており、《自己の行動を優先した関わりの気づき》《子どもとより深く関わることへの気づき》から構成された。

看護学生は、「自分のやることばかり考えていたな (N)」、「子どもに壁をつくっていたと気づいた (R)」といった《自己の行動を優先した関わりの気づき》や「子どものさみしさを自分で考えた関わりができてないことに気づいた (B)」、「そばにいることはしていたけど、泣いている理由を考えていなかった (L)」といった《子どもとより深く関わることへの気づき》があった。

6) 【子どものケアの迷いを解決するための姿勢】

このカテゴリーは、看護学生が子どもとのケアにおける迷いに対して、自己の解決への姿勢を見つめ直していたことを示しており、《相談し解決する姿勢》《手本を参考にする姿勢》《メンバーとの悩みの共有》から構成された。

看護学生は子どもとの関わりを深めていくなかで、「自分だけで考えてもいい援助はできないと思って (Q)」、「具体的に提案してもらい、こういう方法もあるならこの方法でやってみようと思えた (A)」という《相談し解決する姿勢》を意識していた。また、子どもとの関わりの場面で看護モデルを見ることで、「先生を見て、上手く子どものさみしさをそらすことができるようになりたいなって思った (N)」という《手本を参考にする姿勢》について意識していた。さらに、同じ体験をしている仲間存在から、「同じ経験をしているため話し合うことで患者さんにとってもいい影響が出ると思って (Q)」というような《メンバーとの悩みの共有》を実感していた。

7) 【子どもに寄り添うケアへの関心】

このカテゴリーは、看護学生が子どもにより深く関

われるようになり、子どもに寄り添うケアへの関心が示されており、《子どもに負担をかけない気遣い》《子どもを主体にしたケアの意識》《子どものケアへの使命感》から構成された。

看護学生は、子どもとの関わりを繰り返すなかで、「どうしようという焦りはもう顔に出さない、子どもに伝わらないようにしよう (H)」、「子どもが疲れないようにしよう、自分の行動や(関わる)時間を気にしよう (G)」という《子どもに負担をかけない気遣い》を意識していた。「私を感じている以上につらい思いとかあるんだらうなって改めて思った (K)」といった《子どもを主体にしたケアの意識》は、ほとんどの看護学生よりみられていた。さらに「子どもに合わせて行動していくうちに、この子をもっとみてあげたいなっていうかんじになった (O)」、「(良くなって)家に帰ってもらいたいという気持ちが強くなって (P)」という《子どものケアへの使命感》を意識していた。

VI. 考察

小児看護学実習において、子どもとの援助関係にかかわる看護学生の自己洞察は、子どもとの関わりや他者の意見や評価をもとに自己洞察を行い、自己の状況や姿勢への気づきを得て、子どもとの援助関係を構築し看護実践へと発展させていく様相が見出された。分析結果である看護学生の自己洞察のカテゴリーから、「子どもとの接近を試みる段階」「子どもへの理解を深める段階」「子どもの援助への関心を高める段階」に大別されていると考えられた。3つの段階に分類しカテゴリーとの関連を図1に示し、教育の方向性とともに考察していく。

1. 子どもとの接近を試みる段階における看護学生の自己洞察

看護学生が受け持った子どもとの接近を試みる段階では、【子どもと自分との関係性の模索】【子どもとの関係構築における気がかり】を意識していた。

子どもと接する経験が少ない現代の看護学生は、子どもを受け持つにあたり、看護学生はどのくらいまで

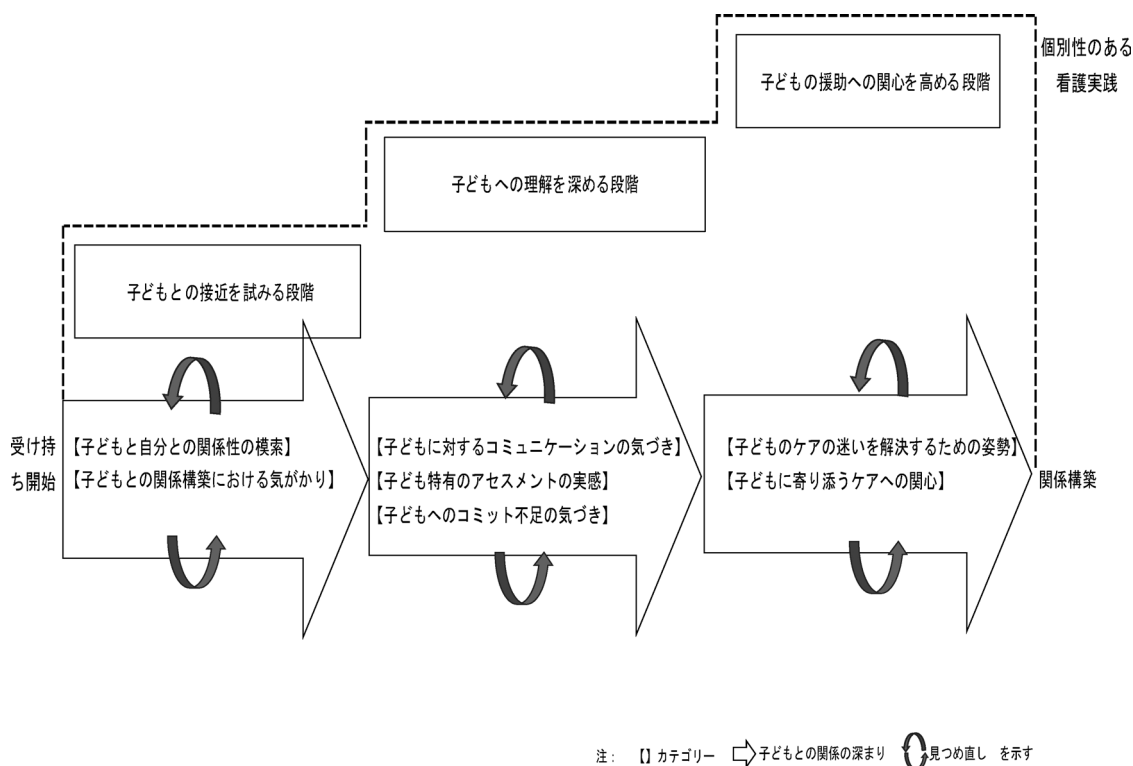


図1 看護学生と子どもとの援助関係の構築にかかわる自己洞察

子どもに接近しても良いのかと適切な関係性にたどり着くために、《子どもとの距離感への模索》をしていたと考えられた。また、看護学生と成人との関係形成において、学生は患者との会話の長さや親しみのこもった返答など会話の内容から患者との関係を主観的に評価している<sup>12)</sup>が、子どもの会話からは、学生が期待する反応を得られにくいこともあり、関係性を確認することに不確かさの状況が生じていたと思われる。このような不確かさから看護学生は、子どもの反応を見ることに敏感となり《友好的な反応による関係性の確認》や《他者による肯定的評価からの確信》をしたと考えられた。武井<sup>13)</sup>は、確かなものとして証明できない相互交流性コミュニケーションでは、自己のアイデンティティが宙づり状態になることを述べており、看護学生は、自身と子どもとの関わり方を確立するために、子どもの反応や他者からの評価から捉えていたことが考えられた。一方で看護学生は、子どもに良いケアをしなくてはという《より良い関わり方への焦り》や、早く子どもの気持ちを聞き出さなきゃとい

う《子どもを早く理解することのプレッシャー》があった。さらに、《客観的に子どもを見る余裕のなさ》もみられ、それが子どもの本質を捉え関係を構築することに影響すると感じていた。看護学生は、短い実習期間で課題達成への不安があり、短時間で看護展開できるか、期限までに記録を完成できるかという不安がある<sup>14)</sup>。しかしながら、看護学生は自身で立案した援助計画に沿って看護実践できることでの達成感を求めている<sup>15)</sup>。看護学生は、課題達成を意識し子どもの援助に必要な情報収集をするために、受け持った子どもとの関係を早期に築かなくてはいけないという焦りを抱く状況が見出された。

子どもとの接近を試みる段階の教育的支援として、看護学生が、自身と子どもとの関係性を模索し、どのように子どもに関わっているのかを客観視できるように支援することや肯定的に子どもとの関係性を捉えられるように支援する必要性が考えられた。看護学生が子どもと関わり間もない時には教員が近くにいるなど、安心して子どもと関わる体験をさせることや、看護学

生が子どもの反応を意識してみるように声掛けをすることの重要性が見出された。さらに、カンファレンスや記録などを活用し日々の子どもの関わりを再構成させることや、適切な関わりができていない看護学生には肯定的評価を伝えることで、看護学生が安心して子どもに関わることへの後押しとなると考えられた。近年は、小児看護学実習のフィールドも範囲を拡大させている現状も述べられ、小児病棟での実習期間と保育園の実習期間を合わせて単位としている大学もある<sup>16)</sup>。今後は小児病棟実習の短期化が想定されるため、子どもとの受け持ち開始時に看護学生の思考のサポートをしていくことは、早期に援助関係構築につなぐ要点になると考えられた。

## 2. 子どもへの理解を深める段階における看護学生の自己洞察

看護学生は、子どもへの理解を深める段階では、【子どもに対するコミュニケーションの気づき】【子ども特有のアセスメントの実感】【子どもへのコミット不足の気づき】があった。

看護学生は、子どもとの関わりから、《大人とのコミュニケーションの違い》を意識することで、言語に頼るコミュニケーションである《受身のコミュニケーション特性》と子どもへの積極的関与が不足していたことに気づいていた。受け持ちの子どもが年少児であれば、言語的コミュニケーションが発達途上であるため、言葉のやりとりで意思疎通することは困難である。また、思春期の子どもでは会話はできる反面、発達特性上、子どもとの関係性が構築されないと多くの会話を引き出すことは難しい。このような状況下に身を置くことで、改めて子どもに対するコミュニケーションの在り方に気づかされたのではないかと考えられた。また、看護学生は、《子どもの言動に対する思い込み》《表面的な情報での解釈》を認識し、子どもを見た目で判断し捉えていたことを意識していた。看護学生は、子どものイメージが広げにくく表層的なイメージになる傾向があり、子どものイメージは実際に実習で子どもと接触することで修正されていく<sup>17)</sup>と

あり、本研究においても、子どもの様子を見て「わがままに見えた」「健康な子と同じように見ていた」といった表層的なイメージで子どもを捉え関わり、外見に先行した子どもの理解になっていたと推測された。しかし、看護学生は子どもと関わる中で「大人と違って発達も重要」といった《発達を踏まえたアセスメントの重要性》に気づいていた。子どもを理解するためには、これまでの大人を対象にしたコミュニケーションのスタイルやアセスメントの仕方では立ち行かないと感じ、子どものアセスメントの視点を見直すことにつながったと思われる。また、《自己の行動を優先した関わりの気づき》《子どもとより深く関わることへの気づき》を得ることで、子ども中心に捉えていくことや子どもの気持ちに立って物事を考えるきっかけになっていたと思われる。これらのことから子どもとの接触体験の重要性が再確認された。

子どもへの理解を深める段階の支援として、看護学生にバイタル測定や食事や遊び、治療の場面など様々な子どもの援助場面に関わる機会を取り入れ、子どもの反応や成長発達でのコミュニケーションの違いに目を向けていけるよう支援することが必要となる。また、カンファレンスでの看護学生の発言や学生の記録の内容を確認し、看護学生の気づきや子どもの理解の把握につとめ、子どもの看護への理解が進む様、気づきの肯定的フィードバックや子どもの反応の意味づけを助けていく教員の関わりが必要である。わかるようになりたい、もっと知りたいという気持ちは、自分が前より変化していると確信できたときに生まれ、そのような確信がさらなる意欲を生み出し積極的に学び取ろうとする姿勢になる<sup>18)</sup>。その教育に看護記録は有用な学習教材となるが、看護学生は《記録と関わりの両立の必要性》において、記録と関わりのバランスを考えないと子どもの理解は難しいことを感じる様相も見られた。子どもから得た情報やそこから考えられたアセスメントを言語化することは学習が向上することに寄与する反面、その作業を苦手とする看護学生では、記録に苛まれて子どもとの関わりが進まないという不均衡が生じてしまう恐れがある。そのためには、実習開

始から記録が滞らないよう、記録を確認し適時指導していくことが求められる。

### 3. 子どもの援助への関心を高める段階における看護学生の自己洞察

看護学生は子どもへの援助実践に向けて、【子どものケアの迷いを解決するための姿勢】【子どもに寄り添うケアへの関心】を意識していた。その中で看護学生は、《相談し解決する姿勢》や《手本を参考にする姿勢》を心がけるようになり、子どもの援助に対する迷いを解決するためには、教員や看護師からの専門的な助言や手本が役立っていたことが考えられた。また《メンバーとの悩みの共有》では、メンバーが自分と同じ悩みを持っていることや同じ目標を持つメンバーの頑張りを知ることで自身への励みになり、子どもの援助実践への後押しとなりうることが考えられた。甲斐<sup>19)</sup>は、見方が定まると患児に必要な看護が描けるようになり、さらに患児への関心は高まると述べていることから、看護学生は、相談や模倣から「自分もできるかもしれない」という気持ちにつながり、子どものケアの迷いを解決させる一助になっていた可能性がある。子どものつらさの共感的理解といった見方の定まりが、子ども主体のケアや子どものケアへの使命感を意識することにつながり、子どもに寄り添うケアへの関心が高まっていったのではないかと考えられた。

看護学生は、《子どもに負担をかけない気遣い》として、子どもに対して苦痛にならないようにという思いに立って見つめ直すことで、「怖がらせないように」「疲れさせないように」などの気遣いある関わり方を見出していた。また《子どもを主体にしたケアの意識》は、子どもを主体にしたケアについて検討する様相がみられ、さらに《子どものケアへの使命感》では、子どもの援助者として早い回復を望むように看護学生の支援と思考の変化がみられた。

このような子どもとの援助関係構築に向けては、実施した援助の反応を捉えさせることで、子どもの安全安楽を考える機会になることが考えられた。看護学生には、子どもの反応や思いを捉えて看護援助のプラン

に反映させた場合、効果的な子どもへの援助についてフィードバックすることで、さらに子どもの援助への意識化をはかれるようになる可能性がある。そのことで看護学生はより個別性の高い看護実践へつなげていけると考えられた。

## Ⅶ. 結論

小児看護学実習を履修した看護学生19名に半構成的面接を行い、質的記述的に分析した結果、以下の結論を得た。

小児看護学実習における看護学生と子どもとの援助関係にかかわる学生の自己洞察の実態が明らかになった。看護学生は、子どもとの関係性を模索しながら、子どもに向き合う姿勢に気づき、子どもに接近していた。子どもとの関わりを重ね、子どもとの体験を通し、子どもの特徴を捉え、子どもの理解や見方を学修し関わり方を変化させていた。子どものケアの迷いについて解決しようと試み、子どもの立場になって子どものケアに気持ちを向けていく思考がみられた。看護学生は、実習内に自己洞察することで、子どものケアへの関心を高め実習が促進された様相がみられた。これらから、看護学生の自己洞察を促すことができるよう、子どもを受け持ち始めた時から、学生に気づきを促すような声掛けや、カンファレンス等での学びの共有などの教育的支援を取り入れる重要性が考えられた。また、子どもの援助に特有なアセスメントを進める必要性を看護学生に気づかせることで、子どもの看護実践へと発展につながる可能性が示唆された。発達途上にある子どもへの看護実践を円滑に進める学修には、看護学生の自己洞察を促す教育的関わりは重要であり、看護実践力の育成に寄与すると考える。

## Ⅷ. 研究の限界と課題

調査協力を得た2校は、小児看護学実習における実習体制や指導体制に差異がなかったため、研究結果の一般化には限りがある。今後、様々な実習条件下で調査し追及していきたい。



謝辞

本研究にご協力くださったすべての方々に深く感謝いたします。

なお、本研究は、平成29年度国際医療福祉大学修士論文の一部を加筆、修正したものである。日本小児看護学会第28回学術集会において一部発表した。

本研究において利益相反(COI)に関して該当すべき事項はない。

文献

- 1) 文部科学省. 2017. 大学における看護系人材の在り方に関する検討会, 看護教育モデル・コア・カリキュラム「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/078/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/index.htm) 2019.4.26
- 2) Peplau HE (小林富美栄訳). 人間関係の看護論. 東京: 医学書院, 1973: 10
- 3) 古川照美, 山内久子. 精神看護学実習における看護学生の自己洞察について. 弘前大学医学部保健学科看護学紀要 2003; 2: 27-36
- 4) 西田みゆき, 北島靖子. 小児看護実習における学生の困難感. 順天堂医療短期大学紀要 2003; 14: 44-52
- 5) 小口多美子, 関未知代, 吉村由紀ら. 小児看護学実習において学生が直面する困惑. 日本看護学会論文集. 小児看護 2002; 33: 148-150
- 6) 阿部智美. 患者とのコミュニケーション困難場面における看護学生の「解説, 問題解決, 感情」との関連. 日本看護研究学会雑誌 2013; 36(1): 149-156
- 7) 小代仁美. 看護学生の「子どもとの関係」の概念分析. 日本小児看護学会誌 2015; 24(1): 39-46
- 8) 柴邦代. 小児看護学実習における学生と受け持ち患児との関係形成プロセス. 看護研究 2005; 38(5): 51-64
- 9) 高橋由美子, 大見サキエ, 宮城島恭子. 学生が子どもの立場に立った看護が実践できるようになるプロセス. 日本看護学会誌 2012; 32(3): 35-44
- 10) 中野綾美. 小児看護技術. 第3版. 大阪: メディカ出版, 2015: 12
- 11) 舟島なをみ. 質的研究への挑戦. 第2版. 東京: 医学書院, 1999: 40-79
- 12) 佐藤美紀, 大島弓子, 小松万喜子ら. 患者との人間関係形成の初期段階における学生の主観的評価とその理由—基礎看護学実習の体験を通して—. 愛知県立看護大学紀要 2006; 12: 17-22
- 13) 武井麻子. 感情と看護一人とのかかわりを職業とすることの意味. 第1版. 東京: 医学書院, 2014: 132
- 14) 荒木真壽美, 吉田美幸. 小児看護学実習における学生の不安と学びの特徴. 日本看護学会論文集. 小児看護 2013; 43: 157-160
- 15) 柴邦代. 小児看護学実習における学生の満足感. 愛知さわみ看護短期大学紀要 2007; 3: 97-104
- 16) 山内朋子, 川名るり, 筒井真優美ら. 看護系大学小児看護学実習フィールドの現状と今後の研究課題に関する文献検討. 小児看護学会誌 2017; 26(58): 84-90
- 17) 上山和子. 看護学生の子どもに対するイメージ変化と小児看護学の授業について. 新見公立短期大学紀要 1999; 20: 125-133
- 18) 藤岡完. 堀喜久子. 看護教育講座3 看護教育の方法. 第1版. 東京: 医学書院, 2002: 65
- 19) 甲斐鈴恵. 学生の認識の発展を促す実習指導に関する事例研究—小児看護学実習における指導者の認識に焦点をあてて—. 日本小児看護学会誌 2010; 19(3): 32-38

## **Nursing students' self-insight related to establishment of helping relationships with children during clinical practice of pediatric nursing**

**Yuko YOSHIDA and Chiharu FUJITA**

### **Abstract**

This study aimed to clarify how nursing students' self-insight relates to the establishment of helping relationships with children during clinical practice of pediatric nursing and to discuss educational supports for nursing students to develop self-insight. Semi-structured interviews were conducted with 19 nursing students belonging university and junior college in nursing who had completed the clinical practice part of pediatric nursing course. The interview data were analyzed descriptively and qualitatively. In terms of the students' self-insight related to establishing helping relationships with children, the following seven categories were identified: "searching for relationships with the children", "worries over establishing relationships with the children", "awareness of how to communicate with the children", "recognition of a nursing assessment peculiar to pediatric nursing", "awareness of lack of interaction with children", "positive attitude likely to solve the problem of unconfident care for children", and "interest in nursing care for children by standing close beside them". It was discussed that self-insight helps the students adjust their attitudes toward the children, when nursing students try to establish the relationships with the children. We suggest the necessity of educational support that can activate each student's self-insight from an early stage of clinical practice where individual nursing students take charge of children.

**Keywords** : clinical practice of pediatric nursing, nursing students, children, helping relationship, self-insight